

山城地域における北白川C式土器の地域性について

柴 暁彦

1. はじめに

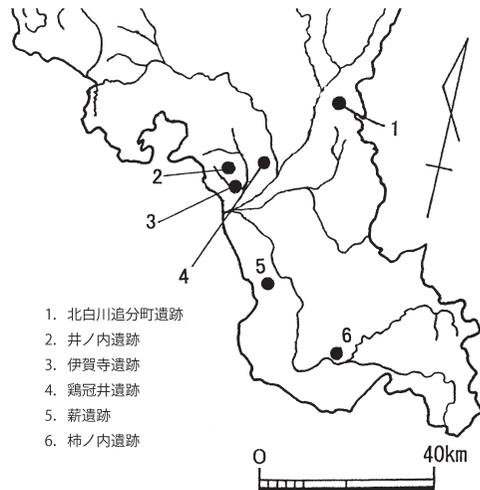
近年、京都府長岡京市内で京都第二外環状道路建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代中期末の竪穴式住居跡が見つかり、乙訓地域における集落の状況の一端が明らかになった。以前、筆者は京田辺市薪遺跡の調査で、縄文時代中期末の竪穴式住居跡と土坑群を発掘し、関連する遺構のなかから土器資料を得た。出土した土器は京都市左京区に所在する北白川追分町遺跡をはじめとする、北白川遺跡群で出土した土器(北白川C式)と類似したものであった。しかし、乙訓地域で出土した土器は縄文施文と沈線による区画が主体となる土器であり、土器編年では北白川C式土器のなかでも、後半期に属するものと考えた。

そこで乙訓地域で出土した土器の特徴が時期差によるものか、地域差によるものなのかを検討課題として論を進めたい。

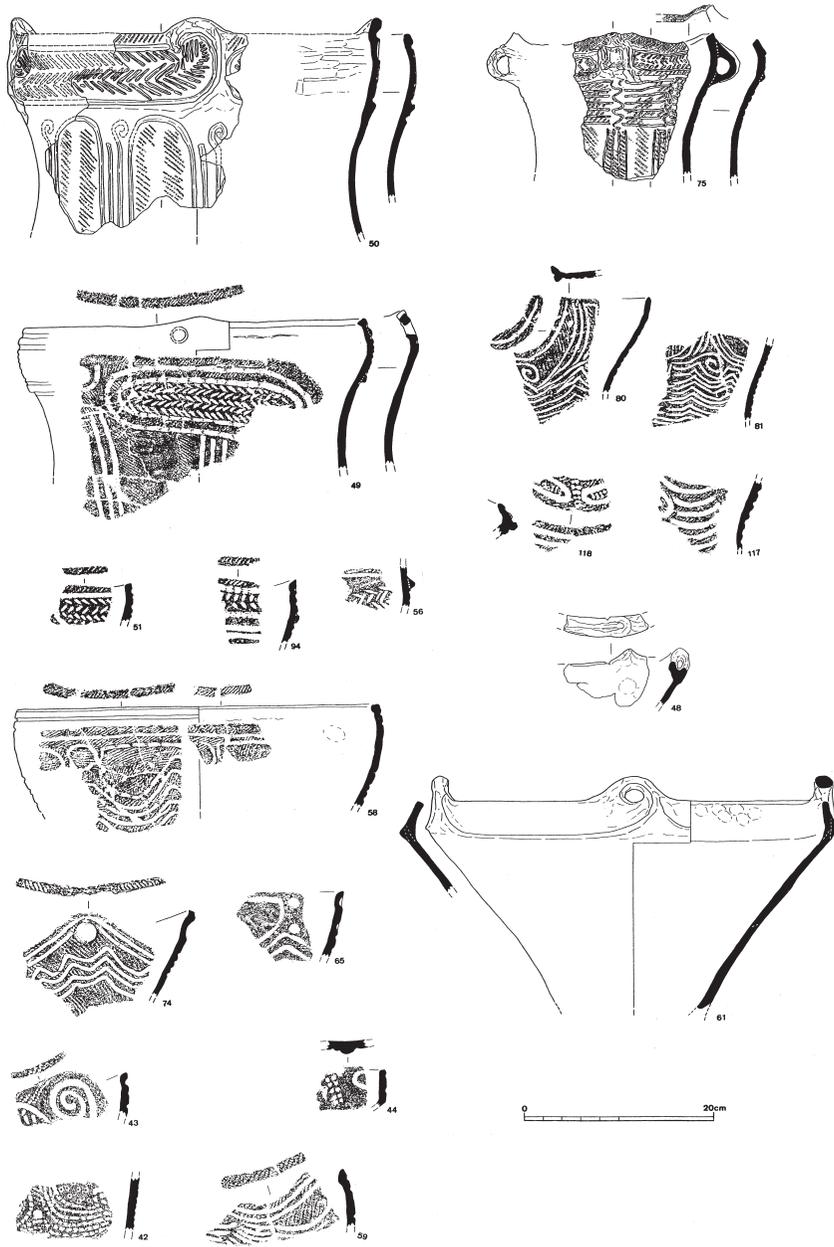
2. 各遺跡の概要

a. 北白川追分町遺跡 京都市左京区北白川追分町、京都大学北部構内に所在している。昭和53年度に実施した、京都大学理学部物理学科校舎新営工事に伴う発掘調査である。調査場所は、北白川扇状地末端の微高地に接する低湿地にあたる。検出遺構はなく、湿地に縄文時代前期～晩期までの遺物が堆積していた。特に中期末の土器群は深鉢と浅鉢に分類し、口縁部の表出技法や文様帯の位置などで器種細分している。この方法で分類された土器が、北白川C式の基準資料となっている。

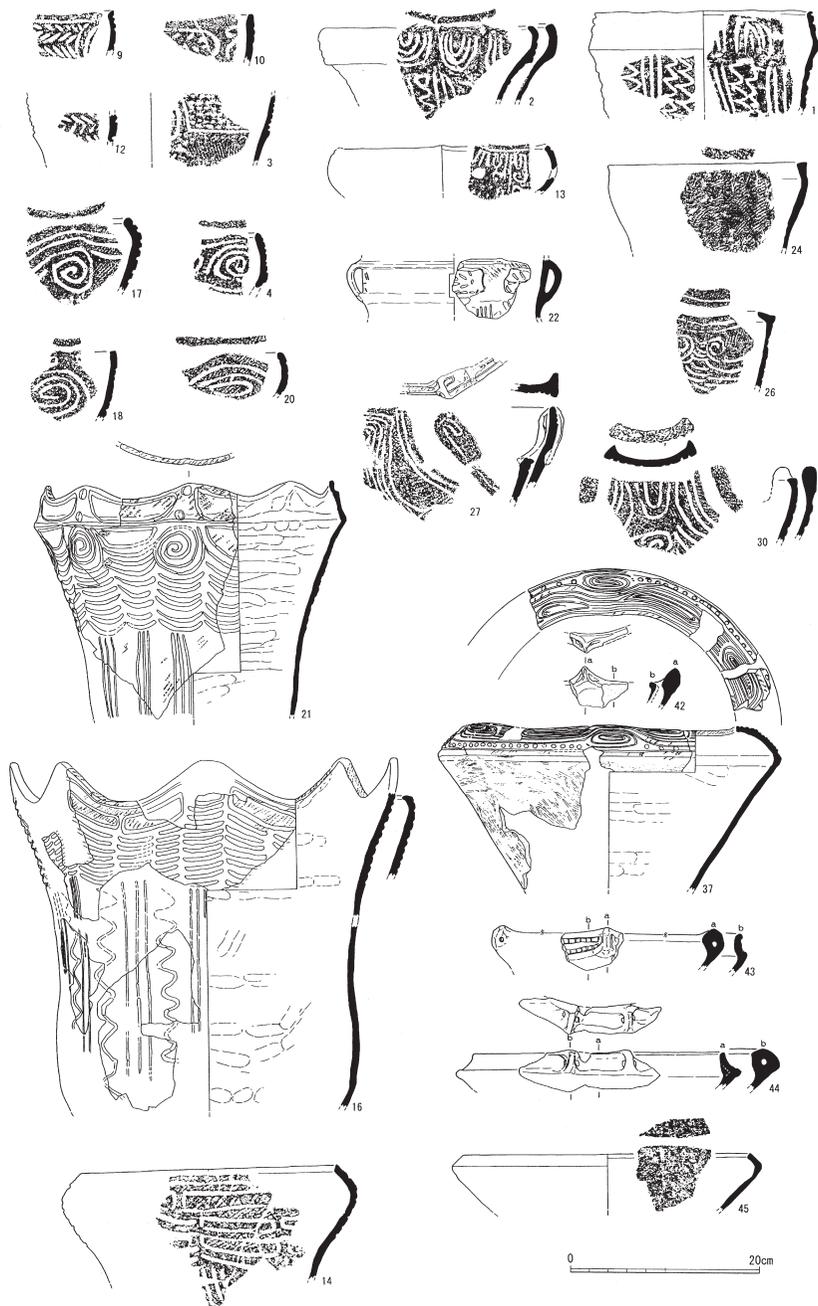
b. 薪遺跡 京都府京田辺市薪巽2番地に所在する。遺跡は木津川左岸の甘南備山から北東側に派生する丘陵裾部に立地している。第6次調査の調査期間は平



第1図 山城地域縄文時代中期末遺跡位置図



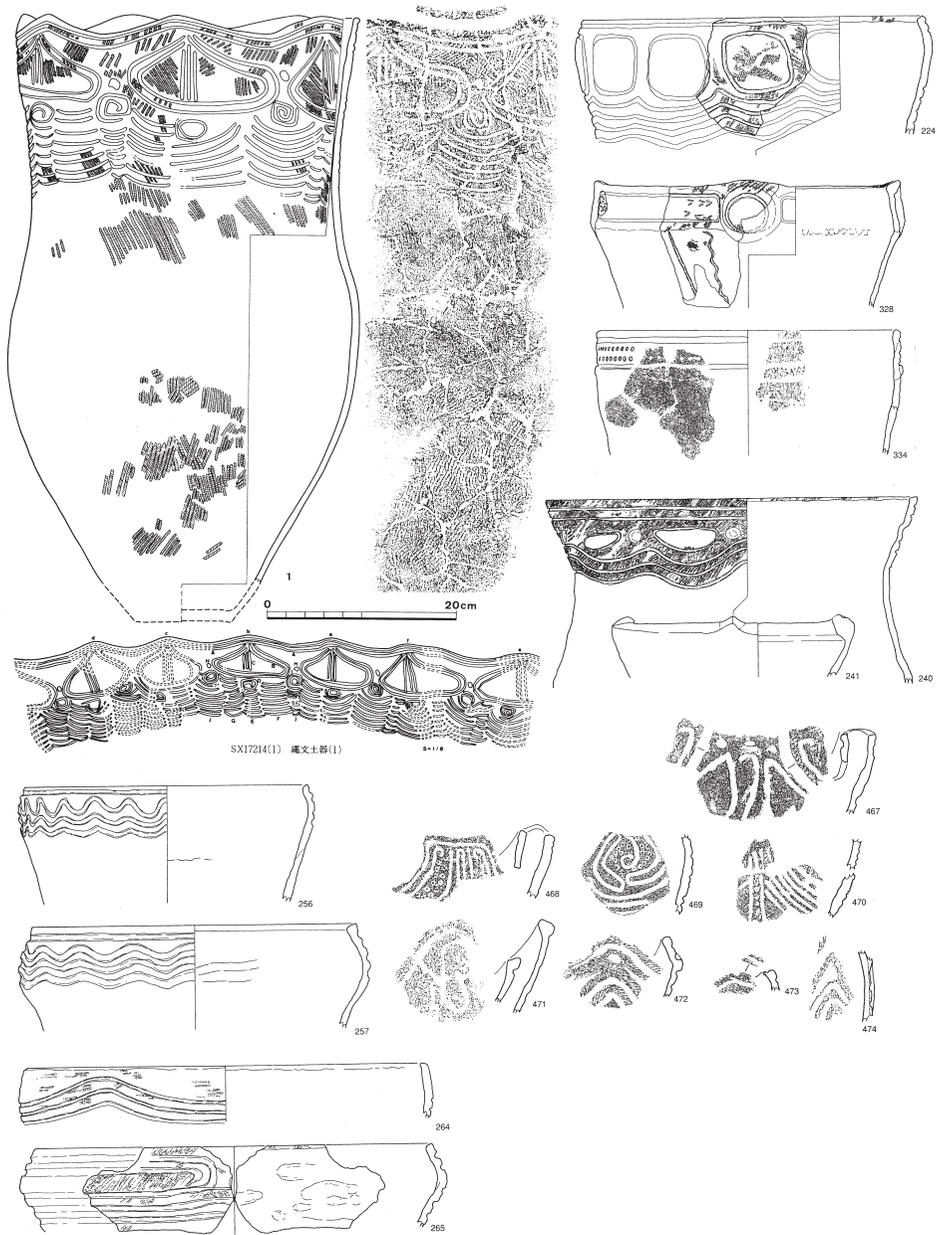
第2図 出土遺物実測図 新遺跡



第3図 出土遺物実測図 伊賀寺遺跡(府道)



第4図 出土遺物実測図 柿ノ内遺跡・伊賀寺遺跡(二外)・井ノ内遺跡



第5図 出土遺物実測図 鶏冠井遺跡・野畑遺跡(224~474)

成16年9月21日~12月27日である。検出した遺構は竪穴式住居跡、土坑群29基などである。また、第7次調査は平成17年9月26日~平成18年2月27日まで実施した。第6次調査の南東側で発掘調査を実施し、土坑群の続きを確認した。これらの調査によって北白川C式期の土器が主として土坑群(SK17など)に伴って出土した。

c. 伊賀寺遺跡(府道、第二外環状道路) 長岡京市下海印寺下内田地内に所在する。京都第二外環状道路の本線部分(以下、二外伊賀寺遺跡とする)と、側道にあたる府道大山崎大枝線道路の改良事業による調査(以下、府道伊賀寺遺跡とする)に分かれている。

府道伊賀寺遺跡は、遺跡の西側にある小泉川氾濫原と約1mの高低差のある、段丘上に位置する。発掘調査は平成20年5月7日～7月30日まで実施した。3トレンチで竪穴式住居跡に伴うと判断される支柱穴6基と中央付近で炉跡SK19、貯蔵穴と考えられるSK33を検出した。住居跡の規模は支柱穴から判断して、6.3～7.4mを測る。支柱穴の配列から円形住居と考えられる。この住居跡の周辺から北白川C式期の土器が出土した。

また、二外伊賀寺遺跡は、調査期間は平成20年7月28日～10月10日である。検出遺構は竪穴式住居跡、土坑、柱穴がある。竪穴式住居跡は4基ある。そのうちの1基は、規模が東西4.5m、5.0m、検出面からの深さは0.1mを測る、隅丸方形をなしている。住居跡の床面北寄り中央付近に平面方形を呈する、石囲い炉を有する。

d. 友岡・伊賀寺遺跡 長岡京市下海印寺伊賀寺・下内田に所在する。第二外環状道路に接続する府道石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に伴う発掘調査で、調査期間は平成20年4月24日～10月31日まで実施した。5～8トレンチがあり、縄文時代の遺構は友岡遺跡と伊賀寺遺跡の交わる部分の8トレンチで検出した。検出遺構は竪穴式住居跡8基、土坑、柱穴220基などがある。時期は縄文時代中期の北白川C式期から元住吉山Ⅱ式～宮滝式の遺物が混在した状態で出土した。北白川C式期として認識できる遺構は、土坑、ピットのみである。

e. 井ノ内遺跡 長岡京市井ノ内頭本、廣海道地内に所在する。主要地方道大山崎大枝線地方道路交付金事業に伴い、平成16年7月26日～平成17年3月8日まで、発掘調査が実施された。確認された遺構はSK04で深鉢の体部上半から胴部までの破片が出土した(第4図52)。

f. 柿ノ内遺跡 木津川市加茂町柿ノ内地内に所在する。大井谷川の西側に南北に延びる丘陵の先端部に位置している。恭仁宮下層の自然流路内から北白川C式3・4期の土器が出土した。

3. 北白川C式土器の編年(第6・7図)

北白川追分町遺跡で出土した中期末の土器群を泉拓良が分類を行った。大きく、器形により深鉢と浅鉢に分類し、それぞれを口縁部の表出技法や文様帯の位置などで器種細分をした。そして器種の中における共時的多様性と年代変遷とを、施文手法と文様意匠との組合せによる「文様」によって識別する。これによって器種ごとの型式学的序列を与え、同

じ「文様」の共有によって器種どうしの共時性を証明する。この型式学的組合せを、遺構一括遺物などによって編年作業を行っている。

詳細は編年図(第6・7図)を参照されたい。深鉢はA類1～4、B類1・2、C類1～3、浅鉢はA類1～3、B～D類に分類している。

深鉢A類

A 1 類a 凸帯渦卷文B種で、里木Ⅱ式の併行する東日本の土器で、搬入品である。

A 1 類b 加曽利E式の第5段階に見られる文様構成をとるもの。

A 1 類c 加曽利E式の第5段階に文様の類似を求めることができる土器。

A 1 類d A 1 類bの隆帯が円形に囲むようになり、すでに独立を強めていた渦卷文が区画文から切り離された文様になったもの。

A 1 類e A 1 類bの渦卷文が省略され、隆帯だけが残ったもの。

A 1 類f A 1 類dの隆帯を省略しただけの土器と口縁部文様が短直線文様や蛇行文からなる土器。

A 2 類a 口縁部は幅が狭くなり、隆帯はA 1 類fと同様、口縁部と胴部との境に痕跡的に残る。口縁部全体を肥厚屈曲させた土器もこの類に含まれる。口縁部が区画文からなる土器。

A 2 類b 口縁部が曲線文からなる土器。胴部文様は曲線文が主となり、磨消縄文も目立つ。

A 3 類 丹後地方、山陰地方におもに分布する土器、薄手で口縁部が鋭く屈曲する土器で、器壁内面に文様施文のために生じた凹凸が著しい。胴部には渦卷文と縦長の渦卷文を配している。

A 4 類 従来、星田式と呼ばれていた土器を主体とする。里木Ⅱ式の伝統と思われる連弧文を特徴とし、胴部に垂下沈線をもたないのも特徴となる。キャリパー形の器形が徐々に屈曲のないずん胴な器形へと変化した。文様では、連弧文、区画文、双頭渦卷文の3種類に分かれ、それぞれに変遷が迎えられる。

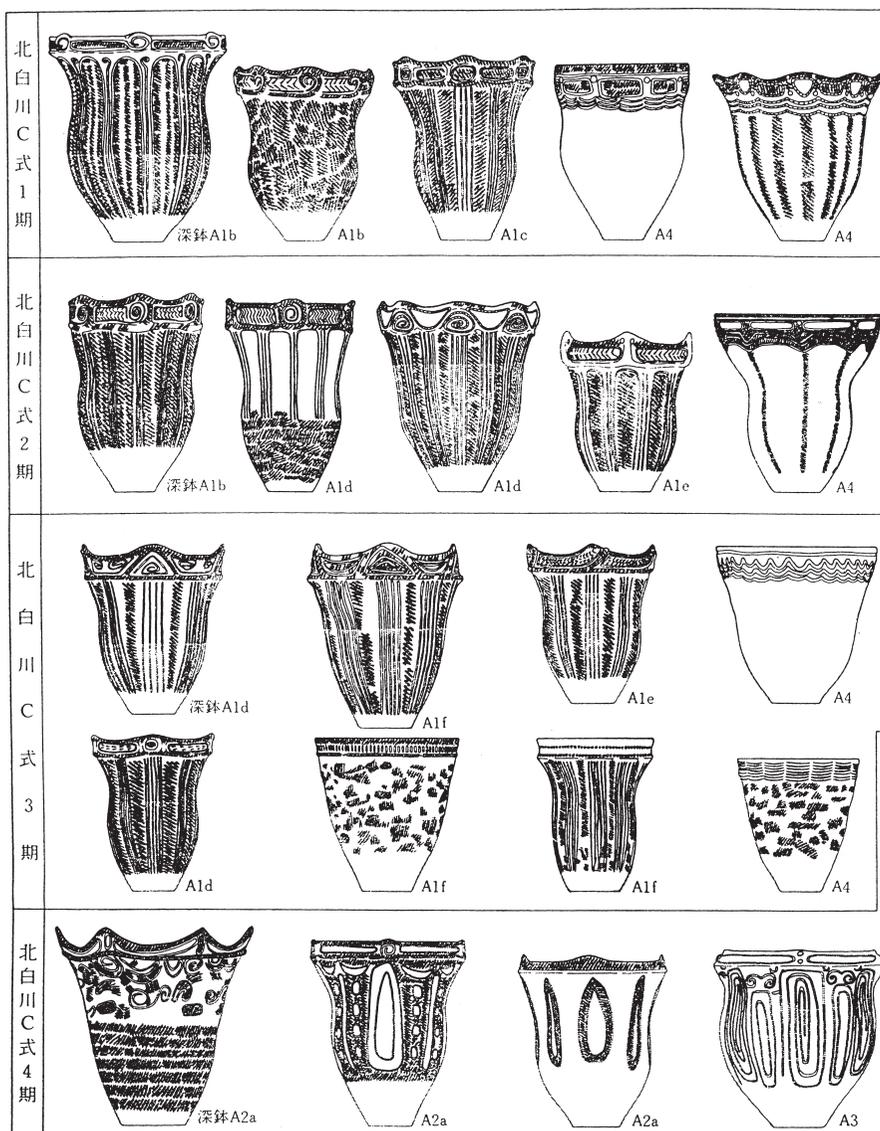
A 5 類 A類1～A 4類と比べて器壁は薄く、調整も丁寧で小型の器形になると思われる。

深鉢B類 楕円形区画文のつなぎ部の形態から2類に細分した。

B 1 類 橋状把手になるもの。

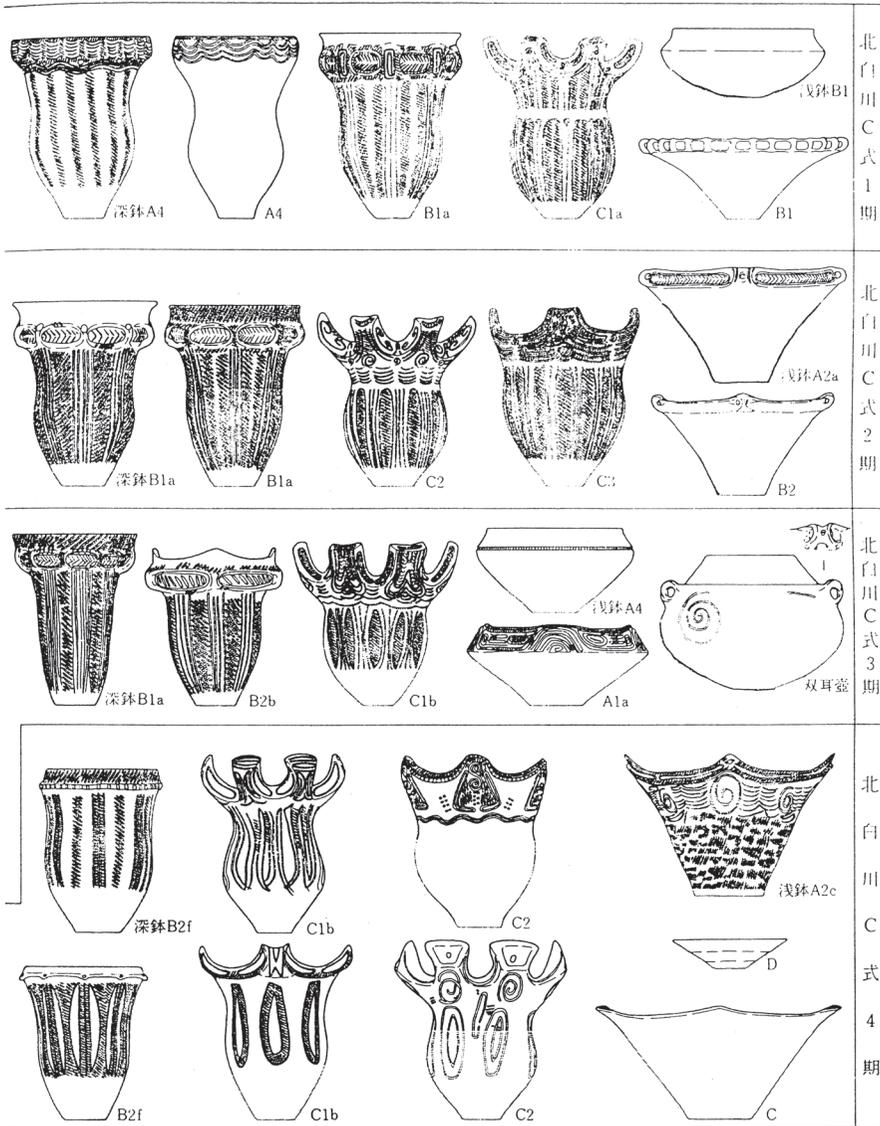
B 1 類a 隆帯の楕円形区画文内を沈線ですらに楕円形に区画し、中に「ハ」字形筆順の羽状沈線文を充填する土器。

B 1 類b 「く」字形筆順の羽状沈線を充填する土器、楕円形区画沈線が省略された土器。



第6図 北白川C式土器編年図(1)

- B 2類 突起となるもの。
- B 2類a 楕円形沈線区画文があって「く」字形筆順の羽状沈線を充填する。
- B 2類b B 2類aを原型に、羽状沈線が短直線になったもの。
- B 2類c 楕円形区画が省略されたもの。
- B 3類d 楕円形沈線区画だけになったもの。
- B 3類e 本類の基礎である隆帯による楕円形区画だけになったもの。



第7図 北白川C式土器編年図(2)

B 3類f 1条の凸帯と化したもの。

深鉢C類 「く」字状に内折した口縁部の文様からA類の変遷を参考にして3類に細分した。

C 1類a A 1類bと同様の隆帯と沈線とで渦巻区画文を描く土器。

C 1類b 楕円形区画間を沈線だけで表す土器。

C 2類 渦巻区画文が横「C」字文に変化した、口縁部に1条の沈線を施す土器。

C 3類 口縁部が無文となる土器。C 1・C 2類の口縁部文様が胴部上半に移動した土器。

浅鉢A類

A 1類a 主文様部を隆帯で囲む土器。つなぎ部には主文様の脇に渦巻文、その横に区画文を多段に施す土器。

A 1類b 口縁部に隆帯のない土器のうち、多重沈線で文様を描く。A 1類aの隆帯が消失し、主文様の脇の渦巻文が多重楕円形区画文に変化した土器。

A 2類b 隆帯だけが消失したもの。

A 2類c 口縁部が縮小したもの。

A 3類b 隆帯だけが消失したもの。

A 3類c 口縁部が縮小したもの。

4. 土器の検討

乙訓地域の北白川C式土器について府道伊賀寺遺跡では、橋状把手の付く深鉢B 1類の破片が1点報告されている(第3図22)。しかし、大半の土器は深鉢がA 3、A 4類であり、全体の傾向として北白川C式3、4期のものが目立つ。また、二外伊賀寺遺跡でも、深鉢A 3類が存在し、同じく北白川C式3、4期となる。

府道友岡・伊賀寺遺跡でも同様の傾向がある(第4図55~69)。深鉢A類では、古段階に位置付けられる口縁部文様帯や主文様を隆帯で囲む個体は全体として少なく、口縁部文様帯が肥厚しただけのもの(55~57)、口縁部文様帯が消失したもの(60・61・64)が多く見られた。また深鉢B類は古段階に位置づけられる橋状把手を持つ土器が見られず、楕円区画文が隆帯と区画文だけで表されるもの(深鉢B 2類)や、退行し凸帯で楕円区画を表すもの、あるいは凸帯のみになってしまったものが多数確認できた。全体の傾向として深鉢A・B類から北白川C式の3・4期の新段階の資料が優位に立つ。

井ノ内遺跡のSK04から出土した土器(第4図52)は、深鉢B 2類dに該当する。外反する口縁部外面に横位の楕円区画文を施し、その下部に二条の垂下沈線が胴部で「U」字に立ち上がり、1本にまとまり胴部を巡るものと思われる。地紋には縄文が施文されている。

鶏冠井遺跡では、土器溜り(SX17214)から出土した深鉢がある(第5図1)。底部を欠くが、ほぼ全形が把握できる資料である。地紋は縄文を施文し、口縁部外面に二条の沈線を施し、三角形の区画文沈線帯(報文では栗型曲線文)に、三角形の頂部から三条の縦沈線を引いている。区画文の間には渦巻文と6~7条の重弧文を施す。星田式系統の土器である。

(参考)野畑遺跡 大阪府豊中市西緑丘3丁目に所在する。豊中市北部、千里川左岸の河岸段丘上に立地している。標高は約45mを測る。第1次、2次調査を合せて約3,000㎡の発掘調査を実施している。第2次調査では、縄文時代後期から中期末まで各文化層が確認できたと報告がある。北白川C式期の遺構は土坑などがある。深鉢A4類とC類が出土している。北白川C式3期の資料である。

5. まとめ

北白川C式土器の成立について、玉田芳英は関東地方の加曾利E式土器が近畿地方に伝播し、北白川追分町遺跡を中心とする比叡山西南麓で土器が受容され、北白川C式土器として独自の発展を遂げ、波紋状に西日本の周辺域に広がっていったと述べた。事実関係として、比叡山西南麓に位置する北白川追分町遺跡、南山城地域の京田辺市薪遺跡(北白川追分町遺跡から24km)で出土した土器は、泉編年による北白川C式1期、2期段階が主体となる。一方、乙訓地域の西山山地の段丘面に所在する伊賀寺遺跡、友岡遺跡(同16km)をはじめとする、土器は北白川C式2期のもも若干認められるが、主体となる時期は北白川C式3期、4期のもものが中心となっている。府道伊賀寺遺跡の土器はA4類に該当するが、口縁部外面に楕円区画文を残すこと、胴部上半に渦巻文および多重弧文以下、3条の垂下沈線を有することから、3期の中でもやや古相を示す。二外伊賀寺遺跡は口縁部文様帯が省略され、2条の沈線になり、その下に楕円区画と多重弧文を施すことから新相にあたる。鶏冠井遺跡の土器もほぼ同時期と考えられる。これらの土器は今まで空白域だった地域を補填する資料であり、乙訓地域での北白川C式の状況を把握するのに、十分な資料といえる。ただ北白川追分町遺跡から直線距離では近いが、現時点においては北白川C式1・2期の土器の出土資料がきわめて乏しいことから、小泉川流域の縄文時代中期末の集落には直接的な土器の影響は与えておらず、北白川C式3期になって土器の受容をしたことは出土した土器の構成から間違いない。この傾向は北白川追分町遺跡から約30km離れた、木津川流域の木津川市加茂町に所在する、恭仁宮下層で確認された、柿ノ内遺跡でも北白川C式3期、4期の土器が流路内から出土していることから考えてもこの仮定は明らかであると考えたい。おそらく河川の水系と地理的条件が付加価値として加味されることも考慮に入れなくてはならない。

また今後資料の増加を待つて論を改めたい。

(しば・あきひこ＝当調査研究センター調査第2課主査調査員)

参考文献

- 泉拓良「北白川追分町遺跡出土の縄文土器中期末縄文土器の分析」(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター)1985
- 柴暁彦「薪遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 柴暁彦ほか「薪遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第121冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 岩松保「3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2009
- 中川和哉ほか「京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡(長岡京右京第927次)・伊賀寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第136冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 戸原和人ほか「4. 京都第二外環状道路関係遺跡長岡京跡(11)長岡京跡右京第957次調査7 ANOOR-8・尾流地区)・下海印寺遺跡・西山田遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 増田孝彦ほか「3. 長岡京跡右京第941次(7 ANOOD-5・OIR-7・NNT-4)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 秋山浩三「11. 長岡京跡左京第172次(7 ANEKD-2地区)～左京二条三坊七町、鶏冠井遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 (財)向日市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会)1989
- 合田幸美「第2章 北白川C式土器について－小阪遺跡出土土器を中心として」(『小阪遺跡』－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター)1992
- 泉拓良ほか「第2章 縄文時代第2節(2) 野畑遺跡」(『新修豊中市史』第4巻考古 豊中市教育委員会)2005
- 玉田芳英「第7章考察第1節 縄文時代中期末～後期初頭の土器について」(『片吹遺跡』一般国道2号太子・龍野バイパス建設工事に伴う発掘調査龍野市文化財調査報告書Ⅵ 兵庫県龍野市教育委員会)1985
- 大下明ほか「第9回 関西縄文文化研究会関西の縄文中期末土器－北白川C式とその周辺－資料集第1分冊」(関西縄文文化研究会)2008